

論文の和文要旨

| | |
|------|------------------|
| 論文題目 | 『ルネサンス——知と魔術の研究』 |
| 氏名 | 澤井茂夫 |

当該学位申請論文である『ルネサンス——知と魔術の研究』は、ルネサンス文化論の試みとして、素材の面において〈散文〉を扱うことにより、ルネサンス期に顕われたさまざまな知の広がりや形の交錯と、知の中でもとりわけルネサンス的であると思われる魔術の知を取り上げて、多方面から分析し論じたものです。

〈散文〉を選択した理由は、〈韻文〉というものが規範に則した表現であり、それを生み出す背景となる社会を鑑みるに、一定の確固たる枠組に納まりうる、悪く言えば閉ざされた世界であると推察されるからです。それに反して、〈散文〉は、そうした規範や制約が破れて開かれた世界に向かいつつある社会において出現する自由闊達な表現だと考えられ、そこに人々の生の声、真実の姿を探ろうと思ったからです。

ここで閉じた世界を仮りに中世、開かれた社会を近代とすると、ルネサンス期は両者の色合いをともに濃く宿した、両方の知が交差する過渡期と言えます。これは移行期という意味ではなく、中世と近代の知が錯綜し合っているいわゆるルネサンスの知を生み出していることで、ルネサンス文化の独自性はこういう点に求められると考えられるわけです。ルネサンスについては、ブルクハルトによる、ルネサンスを近代の出発点とみなして肯定的に捉える近代史観と、ハスキンス等に代表される、ルネサンスを単に中世の最終段階としてみなして否定的に見つめる中世史観の二つが代表的なものが、

本論文では、両史観に束縛されずに、ルネサンス期の実相を直視してみようと思いました。つまり、ありのままのルネサンスを論ずることを主眼としました。

ここでいうルネサンス期とは、だいたい14世紀の中葉から17世紀前半までの約三百年間を指しており、具体的にはフィレンツェをペストが襲った1348年から、カンパネッラの『ガリレオの弁明』が執筆された1616年までです。

また概念的な枠組設定をした場合、初期ルネサンスの代表的哲学者である15世紀に生きたクザーヌスと、バロック期の代表的思想家である18世紀のヴィーコの二人の、〈真なるもの〉についての発言を比較してみると、その間の時期に当たるルネサンス期がくっきりと顕われてくると思われます。つまり、クザーヌスは「真なるものについて、そのあるがままの姿を厳密に捉ええないということを知っているほか何も知らないのである」（『学識ある無知について』）と記して、〈真なるもの〉は不明ゆえに真なるものとしての存在意義があるとしています。これは神のことを指してもいます。一方、ヴィーコにとっては「真なるものは創られたものに等しい」（『イタリア人の太古の知恵』）となって、人間が作り出したもの（文化）への信頼と自信が見られ、人間が作り出したものだからこそ人間はそれが判る、という考えが表出されます。これは自然は神の創造物であるがゆえに神のみがその理を知りうるというのとはちがって、人間自身の所産である文化を、神の被造物である自然界より優位に置いた発想です。文化論の誕生といってもよいでしょうが、ルネサンス期はここまでは至っておらず、クザーヌスとヴィーコの間を、おおかたヴィーコ的な考えに向かってその知は進んでいくことになります。つまり、神の永遠の相の許に一定して在る静止的な知ではなくて、ルネサンス期の人たちは、ギリシア・ローマの古典を発掘して読むことによって人格形成を行なっていく、変化のある動的知が顕著となるわけです。

たとえば、古代から存在する自由七学芸を有機的につないでひとつの円環としているのが哲学で、この哲学が志向するものが神学とされました。この神学は中世期には生き生きとしていたが、しだいにスコラ的に硬直して、ルネサンス期で批判されてそこからの脱皮がルネサンスの知の、強いて言えば文化のひとつの大きな原動力となりました。やはりここからも、硬直（静）から脱皮（動）への転換が看取されます。

こうした形態上の変化と同時に、性質の方はどうかというと、中世初期の大教父時代の知の特徴は、知を三位一体のうちの〈子なる神（キリスト）〉と同一視して、異教徒の知や単なる人間・自然の事柄といった世俗知に対立するものとみなし、根本的にキリスト教者の識見として解釈しました。一方、15・16世紀のルネサンス期になると、宗教的意味合いは排されて、古典古代への意識的回帰によってキリスト教の啓示から離れることになります。

16世紀まで知は、完全なる人間形成、普遍的な知識体得の糧となるものとされました。換言すれば、生きていくうえで不可欠となる精神的營養を意味し、人々は知を得ることで自己の存在理由を見出した（汎知主義）と述べても過言ではないでしょう。中世的な神的知を、ルネサンス期の知識人はゆっくりと噛み砕いて、古典古代の自立性と純粋な人間の尊厳を導入していったのです。

しかし以上のような人間中心の知でありながらも、それを以って真に人間を捉え切ったかは疑問に思えます。たとえば、15世紀後半のフィチーノの活躍した時代の人間哲学がありのままの生活感あふれる人間を描き得たでしょうか。人間は解釈したにせよ、それは〈人間というもの〉といった抽象化された理想像を解明したにすぎなかったのではないのでしょうか。現実の〈生身〉の人間はどこかに置き去りにされていなかったでしょうか。

フィチーノやピーコの述べる人間とは、私たち食事をし排泄する現実の人間とかけ離れていたと思われれます。そこには理念的もしくは英雄の人間がいて、またそうした者の有する聖なる生命はあるが、生活臭に満ちた地べたを這ってでも生きていく雑草のような生命観は感じ取れません。触感的生命はないのです。本論文ではこれとはちがって、触感的で肉感度の高い〈生身〉の〈生身〉たる人間像を提示して、概念的でない直接的な生命が脈打っていたことを論じてあります。そのために説話に着目しました。

本論文は三章で構成されているが、どの章にもその章の導き手として説話を取り上げて論じています。説話がたいがい作者未詳であり、穿った言い方をすれば、一般民衆やその時代の文化の意識・無意識の総和的表現だと考えられるからです。わけても無意識の面が頻度高く見え隠れしているのではないのでしょうか。そこを突破口として考察の域を広め、深めたつもりです。

以下、章立てと各節の内容を列挙します。

第Ⅰ章 生命的基調

- 1 〈心臓を食う話〉の視座
- 2 肉欲の肯定
- 3 性交の相

第Ⅱ章 知の形と広がり

- 1 死に際の機知
- 2 知の形
- 3 知のメディア
- 4 〈文法〉の位置

5 〈有用性〉の意義

6 〈徳性〉の翳り

第三章 魔術の知

1 カランドリーノ説話群

2 預言者カンパネッラ

3 カンパネッラの空間性

4 カンパネッラの地動説

以上です。

第三章の魔術の知の骨格を形作った思想は、新プラトン主義（第一の神である一者が下位の神に分身となって宿る還流の思想。一者は太陽とみなされる）、ヘルメス思想（太陽を万物の中心に据え、大宇宙と小宇宙の照応、生命の有機的調和を図った思想）です。魔術とは人間の知と技が介在して対象（自然）になんらかの効果を与える術です。

本論文では天動説と地動説のせめぎ合いの時代に生きた魔術師カンパネッラに焦点を合わせて、彼の思想的位置を、その著である『太陽の都』と『ガリレオの弁明』を読み解くことで明らかにしています。両著ともいずれも〈散文〉で書かれており、カンパネッラの自由な精神の発露を窺い知ることができます。

そのほか、カルダーノやデッラ・ポルタといった魔術師にも光を当てて、当時の知の在り方を論じてもいます。

本論文を読まれることで、文学でなく哲学・思想でもなく歴史でも宗教でもないが、文学でもあり哲学・思想でもあり宗教でもある本書が表出するルネサンス文化の百科全書的性格が理解されると信じます。知は有機的に円環し、ルネサンス文化はひとつの有機体であることを立証できたとすれば、幸いに思います。